

スイス・チューリヒのまちとその水辺

企画調査部 副参事 北原寛志



近年、我が国は比類の無い経済発展を遂げ、人々のニーズもうるおいやすらぎといった心の豊かさを強く求めている。このため、良好な水辺空間の形成を図っていくことが益々重要となっている。

このような状況から、水辺づくりやまちづくりにおいて自然環境と人間生活に調和した整備が行われているスイスの水辺事情を平成2年7月に視察した。

そこで、ここではスイスのチューリヒ市におけるまちとその水辺の景観、親水性に焦点をあてて紹介する。

スイスはヨーロッパのほぼ中央に位置し、人口約650万人を擁する国である。周辺をドイツ、フランス、イタリア等の国々によって囲まれ、それらの国々の文化の影響を強く受けており、言語においても全人口のうち、約75%がドイツ語を、20%がフランス語を、4%がイタリア語を、そして1%がロマンシュ語を使用しているという特徴を持っている。国の歴史は古く4世紀末まではローマ軍の属領として栄え、6世紀に入りフランス王国、11世紀の初めには神聖ローマ帝国の領土となった。さらにその後ハプスブルグ家の統治下に入ったが、徐々に独立の気運が高まり、1353年には8州同盟が成立し、1499年には同盟も13州となり、神聖ローマ帝国から事実上の独立を獲得した。現在の政治基盤は1848年以来続いている民主連邦で、極めて独立性の強い26の州で形成されている。国土面積は約42千km²を有し、そのうちの約 $\frac{1}{4}$ を山地が占め、北部にはジュラ山脈、南部にはアルプス山脈がそびえている。

チューリヒ市は、スイス国内で最も人口の多い地方自治体であり約35万人を擁し、国内での商工業、金融業の中心であると共に、文化、芸術の中心でもある。今から2千年以上前のローマ時代には既に都市生活らしきものが誕生していたということであった。

7月8日に成田を発ち、途中アンカレッジ経由で約17時間の飛行の後チューリヒクローテン空港に到着した。空港の到着ロビーは照明があるにもかかわらず、穴蔵のような通路を通るので何故か暗い感じを受けた。空港からチューリヒ市街までは列車に乗り、その車窓から見たスイスの第一印象は、沿線に人家、あるいは工場が密集している所が多いものの、建物の配置は整然としていて人家の配色がとても調和していることであった。チューリヒ駅に到着してから徒歩で当日の宿であるホテルへと足を運んだが、さすがに駅前には人の往来も多く、路面電車、車の通行が激しく活況を呈していた。



写真①

チューリヒ市の中心街は概ねチューリヒ湖の北岸、リマ

ト川両岸に広がっているが、駅からチューリヒ湖岸までの間には市内随一の繁華街であるバンホッフ通りが通っている。この通りでは車の進入を禁止し、中央に路面電車のみを通して公共輸送機関、歩行者優先の配慮が伺えた。菩提樹の並木が連なり両側には銀行等のオフィスビルが建ち並ぶとともに、路上ではカフェ、レストランの屋外テーブルで人々が寛いでいた。少しでも日光を浴びようとする人々の気持ちに起因したヨーロッパならではの光景であると思う。また、通りの随所にはポケットパークが設けられており、ストーン・ヘンジ（イギリスの Wiltshire の Salisbury 平原にある巨石柱群）を模したモニュメントで整備されている箇所もあった（写真①）。これはスイス現代デザインの巨匠マックスビルによるものということであったが、チューリヒ市ではこのようなモダンアートの作品を街角に積極的に取り入れ、ユニークな空間を創出することに力を入れているようである。バンホッフ通りを抜けチューリヒ湖岸に出ると丁度遊覧船の船着場となっており、



写真②

周辺には水辺の遊歩道、あるいは石張りの緩傾斜護岸が整備され船着場の景観形成に配慮が見られた。チューリヒ湖とそれより流れ出るリマト川との境にはケー橋が架かっているが、それを渡りゼクセロイテン広場へ出るとその付近の湖岸は水際にベンチが配置され、その背後は幅10m程度の散策空間となっていた。このチューリヒ湖畔もかつては建築群が建ち並んでいたが、市民の憩いの空間として再開発されたということであった。私が訪れた時は昼の休憩時間であったようで、観光客というよりも地元若者達、あるいは会社員と思える人達が皆おもしろおもしろの格好でベンチ等で食事をしていて、この親水空間が市民に親しまれ利用されていることが実感できた（写真②）。その後、再びケー橋に戻りリマト川沿川を見聞したが、ケー橋直下流では兩岸にモーターボート等が非常に多く係留されており、ウォ

ータースポーツも盛んなようであった（見出し写真）。市庁舎付近の左岸側では路面が石畳で構成されていて中世を偲ばせる雰囲気を持ち、建物と河川との間の僅かなスペースを利用し水辺のカフェを演出していたり、あるいは建物の支柱が堤体に直結して一種の水辺のコリドーを形造っている箇所も見られた（写真③）。

チューリヒ市内を流れる河川はリマト川の他にシール湖から流れ出るシール川という河川があるが、このシール川

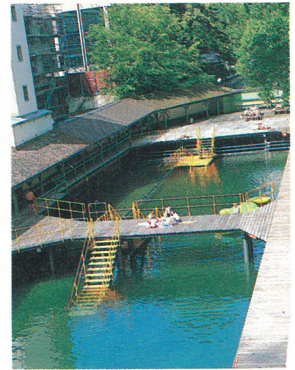


写真③



写真④

にチューリヒ湖から流れ出て中央駅付近で合流するシャンゼングラベンというかつての運河がある。近年ヘドロが堆積し、水質の悪化が問題となっていたところ10年の歳月をかけて美しい水辺に再生したということであった（写真④）。左岸側には街灯、ベンチを配した遊歩道を整備し、右岸側は建物が近接して直壁で構成されているので、植生を配することによりコンクリートの与える印象を和らげ、うるおいを造り出す工夫が施されていた（延長2km）。水面は清く澄んでいて魚類の生息も見られ、チューリヒ湖近くの上流部では堰を設けることにより河道内に水を溜め、周囲を堰で囲い市民の泳ぎの場として一種の河川プールを形成していた（写真⑤）。



写真⑤

以上がチューリヒ市の視察で特に印象に残った所であった。まちづくりの観点からすると、古いまちなみと新しいまちなみとがよく調和している、即ち古いまちなみを残すことにより景観的には重厚感を増し、さらに石畳等は積極的に活用することにより現在でも機能させている点に改めて驚きを感じた。また水辺の整備状況については、花樹を多用し地味ではあるものの、できる限り広々とした空間を設けることにより人々の生活に配慮した整備が印象的であった。